HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	思春期におけるASD のある子どもたちの社会的動機づけの特徴 : Social Motivation Interview 日本語版を用いた調査
Author(s)	若野, 舞乃; 岡田, 智; 大平, 明人; 大谷, 和大
Citation	子ども発達臨床研究, 20, 35-47
Issue Date	2024-06-10
DOI	10.14943/rcccd.20.35
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92666
Type	bulletin (article)
File Information	005-1882-1707-20.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

一般論文

思春期における ASD のある子どもたちの社会的動機づけの特徴

Social Motivation Interview 日本語版を用いた調査

若野　舞乃[1)]・岡田　智[2)]・大平　明人[3)]・大谷　和大[2)]

Features of social motivation of adolescents with Autistic Spectrum Disorder

: Survey Using the Japanese Version of the Social Motivation Interview

Maino WAKANO, Satoshi OKADA, Akito OHHIRA, Kazuhiro OHTANI

要　　旨

自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder：以下，ASD）のある子どもたちの社会的関心は，同世代の定型発達の子どもたちより遅れて出現することがあり，ASD のない子どもたちとの間に社会的スキルや社会的動機に関するギャップが生じやすいと言える。そのため，支援者や保護者などは，ASD のある子どもの困難や行動的側面にばかりに着目してしまいがちで，人間関係の中で生じる内的な側面に目が向かないことも少なくない。本研究では思春期の ASD のある子どもの社会的動機づけの特徴とそのアセスメント方法を検討することを目的とし，6 名の ASD のある子どもとその家族に対して社会的動機づけインタビュー（SMI）を用いてインタビューを実施した。そして，得られたデータについてテーマティック・アナリシス法による質的分析を行った。分析の結果，18 個のサブカテゴリーと 6 つのテーマが生成された。これらのサブカテゴリーは ASD 特性による側面と，経験により二次的に生じた側面に大別された。ASD のある子どもたちの社会的動機づけの特徴とそのアセスメントの観点を考察した。

キーワード：社会的動機づけインタビュー，自閉症スペクトラム障害，アセスメント，仲間関係，友人関係

Ⅰ．問題と目的

1．ASD のある思春期の子どもたちの仲間関係

自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder：以下，ASD）は，社会的コミュニケーション及び社会的相互作用の困難や行動・興味・活動の限定された反復的な様式に特徴づけられる神経発達障害の一つである（APA，2023）。臨機応変な対人関係が苦手であることと，自分の関心，やり方，ペースの維持を最優先させたいという本能

[1)] 北海道大学大学院教育学院
[2)] 北海道大学大学院教育学研究院
[3)] 社会福祉法人 麦の子会

10.14943/rcccd.20.35

的志向が強いなどの特徴があり（本田，2017），ASDのない子どもに比べて仲間関係の構築と維持におけるつまずきが大きくなることが知られている。特に思春期頃になると，多くの若者は心理社会的そして，生理・身体的変化などの葛藤を伴う変化に関して，仲間と共有することで不安に対処していくことになるが，ASDのある若者は，健全な仲間関係をもつことが難しく，二次的障害を強めてしまうことが報告されている（岡本ら，2017）。

こうしたつまずきの背景には，それまでの仲間への社会的関心の乏しさから一転し，周囲に関心を向けられるようになったり友情の定義や要素を知識として理解していたりしても，定型発達の同世代の人々とのレベルの乖離が非常に大きく，対等な関係を築くことが難しい状況がある可能性が示唆される（日戸・藤野，2017）。ASDのある子どもは定型発達の子どもよりも，かなり遅れて仲間や友人に対する社会的関心が芽生え始める可能性があるとされ（日戸・本田・原・藤野，2017；Howlin，1997），幼少時には同世代の子どもたちとの接触を避け，大人に相手をしてもらうことを好んだり，遊ぶときは自分より小さな子どもたちの仲間に加わろうとしたりする傾向があっても，成長するにつれ同世代との関係で自分が人に受け入れられるか，人の輪に入っていけるか，友達をつくれるかを非常に気にするようになることも指摘されている（Howlin，1997）。このような状況について，Howlin（1997）はASDのある人々にとって「他の人と親密な関係を築くには複雑に入り組んだ多くの手順があるのだという理解が完全に抜け落ちていることがよくあり，友だちがいると考えているASDのある成人に話を聞くと，実際はただの知人で，とくに何かを一緒にしたり，共感し合あったりといった関係を示す形跡はほとんど見られ」ないと報告している。

しかしながら，内山ら（2002）が高機能自閉症のある子どもが友達づきあいをうまくやっていく方法について述べる中で「友達となかよく遊ぶことはよいことだ」「友達はたくさんいることがよいことだ」と思い込んでいる子どもの存在に言及している。また，たくさんの友達と元気よく遊ぶことが一番よいと感じている先生や保護者の存在もあり，周囲の大人にとっても子どもの仲間・友人関係について気にしてしまうことで生じる「外圧」による理念への傾倒（吉川，2019；本田，2018）も懸念されることである。このような思い込みが，友達がいない，仲間はずれにされているという認識や本当はひとりでいたくても友達といなければ気がすまない状態につながっている可能性を示唆している。このように，ASDのある子どもが「友だちが欲しい，作らなきゃ」と本人なりの動機づけのもと，本人なりに他者と関わって人間関係を維持することはあっても，周囲の人々とは異なる「友だち」の定義づけや非互恵的な関係性の捉え方などから，人間関係を維持する過程で他者との齟齬が生じてしまい，結果的に孤立してしまうこと，また自分から接触を回避するようになることは想像にたやすい。さらには，周囲から見て人間関係を築こうとしているように思えなくても，本人にとっては関係を築こうとしている，または築こうとした結果，失敗が続き他者との関わりを回避してしまっているという状況があれば，家族や支援者は，その本人なりの「人と関わりたい気持ち」を見落とすリスクも生じるかもしれない。

ASDのある子どもの仲間関係，友人関係を理解し，支援していくためには，他者から見て推測できるため客観的であるとされがちな他者評価／行動的側面だけでなく，本人の自己評価／主観的・内的側面にも注目する必要があるだろう。

2．ASDのある子どもの社会的動機づけ

ASDにおける社会的動機づけに関してはここ10年ほど議論になっているがこの問題を検証している理論や研究は結論が出ておらず，その結果も一貫したものは見られていない（Elias & White，2019）。ASDにおいては，社会的動機づけは一般的に低いものとして考えられており，Chevallierら（2012）はASDを社会的動機づけの

極端に低いケースとし，社会的関心の薄さから十分な社会的学習経験がされず，結果として社会的認知の弱さの原因となることから社会性の障害という側面を説明できるとして，ASD の「社会的動機づけ仮説（social motivational theory）」を提唱した。この理論における社会的動機づけは,「社会的世界を優先的に志向し（社会的志向性），社会的相互作用に喜びを求め（社会的報酬），社会的絆を育み維持するために働く（社会的維持）ように個人を動かす一連の心理的気質と生物学的メカニズム」と定義される（Chevallier et al.，2012）。実際に発達早期においては社会的動機づけを高めることから療育を展開していくプログラムもいくつか存在しており（Dawson et al.，2010.，Kasari et al.，2010），支援の現場においても ASD のある子どもが他者と関わることに対する欲求は着目されてきた。また古長（2022）は上述の「社会的動機づけ理論」を通じて社会的関係性の維持が求められる児童期から思春期・青年期にかけて，対人関係上の困難が生じ，二次障害につながることを予想しているが，このように社会的動機づけに着目することはアセスメントにおいても有用であると考えられる。

しかし，このような ASD における社会的動機づけは文脈依存的であることも示されており，社会的活動や友人との交流が基本的な心理的欲求を支え，社会的動機づけを促進するとも論じられている（Chen et al.，2015）。また ASD のある子どもの社会的動機づけには個人差があること（例えば Neuhaus，2021）や，不安や情動調節など他の要素が関わってくること（例えば Bagg et al.，2023）も報告されており，ASD の社会的動機づけにおいてはその個人の背景や生活史などに影響された個別性があることを意識することの重要性が示唆されている。特に一般的に人間関係が発展してくる思春期においては，社会的経験を良くも悪くも重ねることから，そのときの子どもの社会的動機づけを評価する際には文脈を汲み取ることが必要だと考えられる。

3．ASD のある子どもたちの社会的動機づけのアセスメントにおける課題

このように社会的動機づけに着目したアセスメントは有用だと思われるが，いくつか課題もある。支援が行われる現場においては，子どもたちの周囲との関わりを支えるのは支援者をはじめとする周囲の大人であり，特にコミュニケーションや社会的相互作用に苦手さのある子どもたちの場合には，その背景に何があるのか，どのように支えていけばいいのかを把握することは支援者や保護者であってもそう簡単ではない。Jaswal & Akhtar（2018）は ASD をもつ個人は他者と関わりたいという欲求を示す方法が一般的な他者とは異なる可能性があり，観察した情報と子どもたちの主張とを合わせてどのように理解していくかはかなり訓練が必要であることを指摘している。これらの状況はいわゆる２重共感問題（Baron-Cohen，1995；Mitchell et al.，2021）にも関連し，よりいっそう，ASD のある人の認知・感情のアセスメントを難しくさせていると考える。

また，ASD のある子どものアセスメントで用いられるほとんどの尺度は，客観的な指標としての質問紙や観察法をベースにしたツールになっており，子どもたちの主観的体験の把握は他者の評価を通しての推測を行うしかない。例えば，現在，社会的動機づけを測定する尺度として，国内外で対人応答性尺度（Social Responsiveness Scale Second Edition，以下 SRS-2，Constantino & Gruber，2012）が用いられている。SRS-2 は２歳半～成人までを対象にした，ASD 特性を測定する尺度である。成人版は自己評定と他者評定があるが，児童版・幼児版は親や教師が日常生活の行動観察をもとに評定を行う（神尾，2017）。社会的動機づけは SRS-2 を構成する五つの下位尺度のうちの一つを担う。しかし，Elias・White（2019）は SRS-2 では行動面のアプローチや維持の測定のみに依拠しており，社会への関心や欲求，不安などの個人の内的認知特性（internal cognitive attributes）を測定できておらず，社会的動機づけを単体で測定するものは未だ存在していないと指

摘する。また量的研究では社会的動機づけを変数として用いる際にこの尺度を使用することが多いが，人の動機を測るうえで本人の視点を欠いたものが果たして妥当と言えるのかどうかは疑問が残る。

このように，ひとえにASDのある子どもの社会的動機づけをアセスメントすると言っても，状態を裏付ける背景としてどのような要素が絡んでいるのか，動機づけの高低や有無以上の質的側面にASD特有の特徴があるのか，といった具体的な検討まで至っていない。したがってASDのある思春期の子どもの自己報告をもとにしたアセスメントから，子どもたち自身の捉え方をもとに個々人の社会的動機づけの状態を裏付ける要素を考察することが必要だと思われる。

4．本研究の目的

Elias & White（2019）は「動機づけは顕在的行動や神経学的反応性（neurologic reactivity）から区別されうるにも関わらず，社会的相互作用に関わる目標指向性課題（goal-directed tasks）に影響を及ぼす可能性のある認知的プロセスを既存の尺度では測定できていないため，新しい面接法の開発が必要である」という課題意識から，社会的動機づけインタビュー（social motivation interview：以下SMI）を開発した。SMIは，ASDのある8～17歳の子どもの社会的動機づけのレベルを測定するために設計された半構造化面接法である。この尺度は診断的なものではなく継続的に測定することが想定されており，下位尺度であるSocial Wanting尺度13項目，Social Behavior尺度10項目を合わせた全23の項目から構成されている。質問は面接の担当者が子ども1名とその保護者1名の二人組に同時に行う。回答の際には過去7日間を振り返ったうえで質問に対して言語的または非言語的なコミュニケーションをとることが求められ，言語による回答が難しい場合は視覚的評価尺度を用いることができる。評定の際は対象から得られた回答の文脈を各項目の評定基準と照らし合わせ，評定者が0（None at all）～3（A lot）の4件法で評価をして得点化する。この尺度においては社会的動機づけを「社会的状況に参加することへの関心や欲求（interest or desire to engage in social situations）」と定義し，実際にとっている行動だけではなく，社会的欲求や興味といった対象者本人の内的な認知も含めて社会的動機づけを測定することを目指した（Elias & White, 2019）。

本研究においては子どもの自己報告を要することから，行動面だけではなく子ども自身の認知面も取り扱うことを想定し，内的な欲求面と外的な行動面についてどちらも問うことができるこちらの尺度を扱うことにした。またSMIは子どもだけでなくその保護者1名に対しても同時にインタビューを行うことによりMulti-informant approaches（De Los Reyes, Thomas, Goodman, & Kundey, 2013）の立場をとる。これより，複数の視点による情報から得た情報を用いて評定を行うため，特に行動面を振り返る際に生じるであろうASDにおける自らの経験を語ることへの信憑性への疑念（Frith & Happé, 1999）もある程度軽減することができる可能性があるため，データ収集において有用と考えた。

本研究では，この手法を採用し，ASDのある思春期の子ども及びその家族からのインタビューで得た語りの質的分析を行い，「思春期・青年期のASDのある子どもの社会的動機づけの特徴とそのアセスメントについて検討すること」を目的とする。

なお，社会的動機づけの本研究における定義は「社会的状況に参加することへの関心や欲求（interest or desire to engage in social situations）」（Elias & White, 2019）とする。

Ⅱ．方法

1．社会的動機づけインタビュー（Elias・White, 2019）の日本語版作成

本研究では，インタビュー項目としてSMIの全23項目の日本語訳（例：あなたは、同じくら

いの年の人たちと友達になりたいと思いますか／あなたの友達のことを教えてください。友達と何をするのが好きですか）を使用した。

日本語版作成は，翻訳や自国の文化に合わせた変更を行う際に留意すべき事項を解説したガイドライン（稲田，2015）を参考に以下の手順で行われた。①原版の第一著者であるEliasから翻訳の許可を得た後，主に翻訳を担当した第一筆者と第二筆者の二名で，先行研究や尺度使用におけるガイドラインの読み合わせを行い，尺度自体やそこで使用されている言葉に関する理解を深めた。その後それぞれ独立に順翻訳を行った。②そして翻訳者らは二つの翻訳版を比較，調和させ，日本版SMI draftを作成した。③その際，調和のプロセスを行う上で翻訳者ら以外の発達障害の臨床経験25年以上の臨床心理士１名の協力を得て，実際に半構造化面接を行った後に答えにくさや文化的な違和感の点で翻訳や実施時に関する助言を得た。④そのdraftは，翻訳会社の英語翻訳者によって，原版を見ることなく英語に逆翻訳された。⑤逆翻訳された尺度は原著者の原版との等質性についての確認ののち，日本版としての許可を得た。

２．研究協力者

本研究の協力者は，北海道大学大学院教育学研究院付属子ども発達臨床研究センター（以下，センター）で実施されたソーシャルスキル・プログラムに参加した，ASDの専門医の医学診断がある子ども６名（*M year* =12.8，*Range* =11-16）とその保護者である。協力者である子どもたちはSMIの対象者として合致しており，インタビューは同プログラムの事前アセスメントの一環として実施された。

３．データ収集

インタビューはSMIのプロトコルに沿って実施された[1)]。インタビュアーは第一筆者と第三著者の２名で務めた。インタビューは子ども本人１名とその保護者１名の２名に対して同時に行われ，１回につき30～60分の実施時間であった。

４．分析

本研究では質的分析の手法としてテーマティック・アナリシス法（土屋，2016）を用いた。この手法は質的データの中にパターンを見出すための体系的なプロセスであり，本研究のように複数の語りの中から特徴を浮き彫りにすることを目的としている場合には最適であると考えられる。

録音データはすべて逐語録に起こし，上記の手法を用いて第一筆者と第二筆者の２名がコードの検討を行った。検討の際にはまず得られた文字テキストデータの一つ一つに対して帰納的分析を行い，生成されたテーマを既存の理論を用いて再分析・解釈をするハイブリッドアプローチを用いた。その際，語りが複数のコードに該当することがあり，該当の語りには一次コード，二次コードとして二つのコードを充てた。また，インタビュー対象者は保護者も含むが，本研究においては保護者の語りの内容は子どもの語りの内容を補足したり，文脈を補強したりするのみに活用することに留め，コーディングの対象は子どもの語りのみとした。

またコードの信頼性を確保するために，評価者間一致率を算出した。本研究に携わらない発達障害に関する臨床心理学を専攻する博士課程大学院生と，心理学の修士号を持っており発達障害臨床に15年以上関わる臨床心理士の計２名が，協議のもと次の方法でコーディングを行った。筆者らが生成したコード一覧と，それに対応させていない筆者らのコーディングの対象となった語りの一覧を提示し，それらをもとにコーディングするように依頼した。これらのコーディング結果と筆者らのコーディング結果をCohenのκ係数を用いて，一致率を算出した。結果，一次コードについての評定者間一致率は$\kappa = .60$であり，一次コー

注１）SMIの質問項目，プロトコルについては原著者に問い合わせのこと（Elias & White，2019）。日本語版は原著者からの許可を得た方のみに提供が許されている。

ドと二次コードを含めた結果との評定者間一致率は $\kappa = .81$ であった。一致しなかったコードについては分析から除外し，対応のあったコードと語りを分析の対象とした。

5．倫理的配慮

本研究の実施に際し，北海道大学大学院教育学研究院の研究倫理審査（グループ活動を通した社会性の発達に関する実践研究，承認番号 22-28）の承認を得た。研究協力者には事前に①研究の目的と意義・方法，②研究参加の利点・リスク・補償，③個人情報の取り扱い，④結果の公表，④研究参加の任意性と同意撤回について書面および口頭で説明し，書面での同意を得た。

Ⅳ．結果

逐語録の帰納的なコーディングの結果，18 個のサブカテゴリーが生成された。また，それらは演繹的に「安心／回避」「補償」「興味関心」「自己効力感」「葛藤」「ASD の対人スタイルと中心的困難」の６つのテーマに再分類された（表１）。

1．安心／回避

「安心・安全を求める」「教室以外の居場所」の２つのサブカテゴリーが生成された。これらのサブカテゴリーは「安心／回避」のテーマに集約した。

安心・安全を求める：協力者にとって親しみやすく思える存在は，穏やかで激しさのない人物であった。また何かしらの活動をする際に，一人の方が落ち着けるという理由から一人でいることを選んでいる協力者もいた。

教室以外の居場所：協力者の中には学内で特定の活動場所を持っている者もいた。

2．補償

「他者を参照することへの努力」「自分なりの対処方略をとる」「周りに合わせる」の３つのサブカテゴリーから生成された。これらを合わせると周囲に合わせていく自分なりの努力を意味することから「補償（compensation）」[2)] という概念をテーマとして充てることにした。

他者を参照することへの努力：周囲の子どもたちがしていることや考えていることに注意を向けようとしていることがうかがえた。

自分なりの対処方略をとる：協力者は，うまくいくかどうかは別として，周囲の子どもたちとの関わり方を自分なりに考えて対処しているようだった。例えば，仲良くなるためにとりあえず一緒に活動するといった受動的な関わりや，相手に質問をすることなどが挙げられた。また周りと馴染むために，自分から話をするといったような積極的に関わりに行くことを方法として見出している協力者もいた。

周りに合わせる：他の子どもたちと話題を合わせたり，多少長くても相手の話を最後まで聞くようにしたりすることが語られた。また自分が今持っている知識を相手の話に合わせて用いるという協力者もいた。

3．興味関心

「他者の興味には合わせない」「興味の合う仲間を求める」の２つのサブカテゴリーが生成され，「興味関心」のテーマとして集約した。

他者の興味には合わせない：他者の話に自分の興味がわかない場合には，質問をしたりはするけれども話をしたいとは思わないと語る協力者もいた。

興味の合う仲間を求める：協力者は，同じものに興味がある子が相手だと，自分から友達になりたいと思うことがあると語った。

注２）補償は「神経発達状態（自閉症など）のある人々が，基本的には社会的･認知的困難（メンタライジングなど）があるにもかかわらず，神経典型的な行動（社交など）を示すことができるプロセス」であり，「認知能力に頼らずに問題解決を行うか，認知的困難を克服するための戦略を見つけることが含まれる」（Lai et al.，2020）と定義されている。

表１　社会的動機づけの特徴を示したテーマと語りの例

テーマ	サブカテゴリー（言及数）	語りの例（面接者の質問／補足）
安心／回避	安心・安全を求める（4）	・（どのような人が素敵な人だと思う？）穏やかな性格の人。あんま激しすぎると僕ちょっとついていけなくて･･･。
	教室以外の居場所（1）	・あとたまに〇〇（委員会）の練習とか……，教室にいる機会が少ないですね。月水だけはちょっと〇〇室にいます。
補償	他者を参照することへの努力（3）	・（他の人が思ってることや感じてるこを考えたことある？）まぁ，ある，１～２回。友達が朝に，最近の話題みたいなこと話してる時に，「ひょっとして，あれのこと言ってんのかな」，みたいな感じ。
	自分なりの対処方略をとる（4）	・（どうすれば仲良くなれるかって考えたことある？）とりあえず，なれ合って，一緒に活動することで少しずつ仲良くなるのかなぁ。 ・（話が合わなかったら？）「うーんへぇーそうなんだー」みたいな感じで受け流す。……興味なかったら，そこでぼーっとしてる……。
	周りに合わせる（4）	・（なじむために心がけてることは？）周りと話題を合わせたり。 ・（人とおしゃべりする際には）自分の知ってる知識だけで乗り越えて話す。
興味関心	他者の興味には合わせない（1）	・（自分にとって興味のない話でも話したいと思う？）いや，あまり思いません。なんか質問は，しますけど。
	興味の合う仲間を求める（2）	・自分から積極的に（友達に）なりたいって思うことは，度々ある。同じものに興味があったりとかすると，あります。
自己効力感	他者への関わり方が分からない（2）	・（友人関係で悩むことは？）入るタイミングがわからない。 ・会話に入るタイミングがどうしても測れない。
	共通点があると関わりやすい（9）	・（仲良くなれそうな人いる？）いる。同学年だし，入学した時から一緒…。 ・同じことに興味を持っている人などであればちょっと話しやすいし。
葛藤	関わりたいが，できない（2）	・（土日や放課後に友達と遊んだりする？）しない。したいけどできない。 ・（クラスのまだ仲良くない子と仲良くなりたいと思う？）なりたいけど，なれないんですが……。……まぁこれまで迷惑をかけすぎてしまって，関わるのを（相手が）嫌だというか……。
	他者との折り合いとの葛藤（1）	・（友達が、別の遊びをしようって言ってきた感じかな？）そうそう。そういうので悩む。なんか自分もやりたいけど，友達もやりたいみたいな感じ。
	過去の失敗への反省（2）	・（人間関係で気をつけてることは？）スポーツもできて強い人だったら……「あ，やべ，言っちゃった」みたいなことで，…失敗しました。 ・ガチで，ガチギレされて。…そこから，人の前では結構気をつけてます。
ASDの対人スタイルと中心的困難	一人で楽しむ（3）	・一人でやりたい。…二人だと計画性がごっちゃになっちゃうので。 ・（ほかの人と一緒に遊ぶより）一人で落ち着いて（ゲームをしたい）。
	積極奇異な関わり（1）	・（おしゃべりするのが好きな理由は？）なんでも自分のことを話す…。僕，喋ると本当に止まらないので･････ なんか，そういうことです。
	気づけない（1）	・（周りに気づく？）そうですね･･･ 気がつく時は。気が付かない時が多い。

4．自己効力感[3)]

「他者への関わり方がわからない」「共通点があると関わりやすい」「関わりたいが，できない」「他者との折り合いの葛藤」「過去の失敗への反省」の５つのサブカテゴリーが生成され，これらは自己効力感や心理的葛藤を示す内容であった。

他者への関わり方がわからない：協力者の中には，他者と関わるときに会話の中に入っていくタイミングが分からず，困ってしまうと語る子どももいた。

共通点があると関わりやすい：好きなことや趣味といった自身の好きなことや，学年といった属性に共通点が見られると，話が合うかもしれないと思えて関わりやすくなることが表れている。協力者の中にはそうした関わりに楽しさを感じている子どももいた。

5．葛藤

関わりたいが，できない：学校の友達と学外で遊びたい，まだ仲良くない子と仲良くなりたいなど周囲の子どもたちと関わりたいと思う気持ちはあるけれど，できないと感じることの方が勝ってしまうことが語られた。できないと思う理由に，対人場面での過去の失敗が尾を引いている協力者もいた。

他者との折り合いの葛藤：協力者の中には，友だちと遊ぶときに自分のやりたいことと相手のやりたいことが違うと悩んでしまうと語る子どももいた。

過去の失敗への反省：過去の対人場面での失敗をもとに，またぶつかりそうな相手には発言に気を付けているという語る協力者もいた。

6．ASD の対人スタイルと中心的困難

「一人で楽しむ」「受動的な関わり」「積極奇異な関わり」「周りに気づけない」「乏しい自己概念」「関係性よりもルール優先」の５つのサブカテゴリーが生成され，多くの研究で言及されているASD 本来の困難や対人スタイルに関するテーマが生成された。

一人で楽しむ：一人でゲームをするなど好きなことをするときは一人で行うことを選び，楽しむ様子がうかがえた。理由を語ってくれた協力者は，他者がいると計画が狂ってしまうことを挙げていた。

受動的な関わり：自分から進んで誘うのではなく，周りの人から誘われることをきっかけとして他者と一緒に過ごす様子が語られた。話しかけられたら対応する，とりあえず相手に合わせることで仲よくなるという声もあった。

積極奇異な関わり：自分のしたい話をできるときに他者との関わりを好ましく思うと語る協力者や，人を選ばずに関わりに行く様子がうかがえる協力者もいた。

周りに気づけない：周囲の子どもが考えていることや様子に気づくことに難しさを覚えていることが語られた。周りに言われることで初めて気づくと語る協力者もいた。

乏しい自己概念：自分が他者にとってよりよく見えるためにどうすればいいのかについて，考えたことがないと語る協力者もいた。

関係性よりもルール優先：協力者の中には，一般的に学校に持ってくるべきではないとされるものを介してクラスメイトと仲を深めることはしたくないと語る者もいた。

Ⅴ．考察

1．ASD のある子どもの社会的動機づけの様相

本研究では社会的動機づけインタビューの項目をもとにしたインタビュー調査から，ASD のある思春期の子どもたちの社会的動機づけの特徴をテーマティック・アナリシス法を用いて分析した。結果として 18 個のサブカテゴリーが生成され，

注３）自己効力感は「ある行動を起こす前にその個人が感じる『遂行可能感』」と定義される（坂野，2002；Bandura，1985）

それらをもとに６つのテーマが生成された。生成されたテーマを概観すると，「対人スタイル」「中心的困難」のようにこれまでASDに特有のものとして語られてきた特徴に加え,「安心／回避」「補償」「興味関心」「自己効力感」「葛藤」といった，他者と関わる中で随伴して生じる要素がテーマとして生じたことがわかる。これらは周囲から見えにくい心の動きを反映しているものであり，Elias & White（2019）も指摘するように，ASDの行動特徴だけでなくこれらの要素が背景にある可能性をふまえたうえで子どもたちの社会的動機づけを理解する必要性が示唆されている。以下，テーマごとに考察を進める。

「安心／回避」からはなるべく穏やかで自らにとって害のない人が相手であることが安心感に繋がり，社会的動機づけが変化することが推測される。また教室以外に居場所があることも安心して教室に居られることと繋がる可能性も示唆される。居場所を複数持つことは心を休める逃げ場や不安を回避する場が確保されているということとしても考えられるだろう。いくつかの先行研究では(例えば，Bagg et al.，2023；Capriola et al.，2016；Swain et al.，2015)，不安が回避行動に繋がり，結果として他者と関わりたい気持ちが行動にでてこない状態を見て「社会的動機づけが低い」と判断されてしまう可能性があることが指摘されている。ASDでは内的側面であるWantingと外的側面であるBehaviorが乖離しやすいこと（Elias & White，2019）を念頭に入れ，子ども一人一人がどのような状況でこういった乖離が起きているのかを精査することも，支援においては重要なことであろう。また，Multi-informant approaches（De Los Reyes et al.，2013）では，子ども本人と保護者との報告の乖離は，測定誤差や信頼性の低いデータであることを示すので片付けるのではなく，その乖離から有益な情報を取り出すことを推奨している。SMIは，子ども本人の行動的側面と内的側面のディスクレパンシー[4)]，そして，子ども本人と保護者との間の評価／情報のディスクレパンシー[5)]を重要なものとして捉え，支援に活かしていくことができるアセスメントツールとなりうる可能性があると考えられる。

「補償」からは，他者と関わる際に子どもたちなりの他者と関わるための努力があることが示唆される。補償は追加の認知リソースを必要とするために認知的負荷がかかることが報告されており（Livingston et al.，2019），他者と関わる際の疲弊に繋がりやすい。また前述のように「友達がいること」を強く意識しているにも関わらずこうした努力が成功という形を取らなかった結果として孤独感を強めている場合も考えられ，社会的動機づけが以前はある程度あってもこうした行動から生じる疲労感の蓄積やうまくいかなさによる自尊心の低下によって低くなることが示唆される。

「興味関心」からは，好きなことや趣味といった自身の好きなことが共通していると他者と接してみようと思うことが表れている。これはASDの診断にも表記されている興味の限局性とつながる部分であり，これまでもASDのある人々への支援についてこの特性を活かした関わりが論じられてきた（本田，2018）。また余暇活動支援を通した関心が似通った仲間とのつながりも報告されており（日戸・本田・原・藤野，2017），本研究の結果からも，自分の好きな物や関心のあるものが関わりやすさと繋がることが推定される。

「自己効力感」からは，同じ趣味や属性があると他者と関わりやすくなること，また他者への関わり方が分かればより関わりやすさを感じることができる可能性が示されている。このように他者との関わりにおいて効力感を高めていけるような

注４）SMIでは社会的動機を「Social Wanting」と「Social Behavior」に分けて得点を算出することができる。これにより，社会的動機についての個人内差を測定する。

注５）SMIとSRS-2対人応答性尺度をバッテリーさせることで，本人と保護者／教師の間の評定者間差を測定できる可能性がある。

事前知識の習得やロールプレイなどによるスキルの練習が社会的動機づけを高める一因になることが示唆される。

「葛藤」は，自信のなさや過去の失敗経験が尾を引いて他者と関わることを控えている側面があることを示している。外部から見たら回避しているようにまたは関心がないように見えるかもしれない行動の裏には，このような他者と関わるうえでの葛藤が隠れていると言えるだろう。高低という切り取り方だけでは，ASD のある思春期の子どもの社会的動機づけについてアセスメントすることは難しいことが示唆されている。

上記では「安心／回避」「補償」「興味関心」「自己効力感」「葛藤」についてそれぞれ考察をしたが，これらの要素は研究協力者らのこれまでの自身の経験から得てきた感覚や認識が反映されているものと考えられる。これらは決して独立して生じているのではなく，対人場面において互いに干渉し合い子どもたちに影響を与えているものであり，ASD の行動スタイルや中心的困難と結びついて外から見てわかる行動に現れる。またその行動が周囲からの受け入れ度合に繋がるといったように，これらの要素は循環していると言える。したがって ASD のある思春期の子どもの社会的動機づけについて着目するときは，観察可能な行動だけでなく子ども本人の認識も合わせて取り上げる必要があること，これらの要素が結びついている状態で個々の特性と共に存在することを念頭におくことが大切であると考えられる。

2．本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界点について述べる。まず本研究の協力者は全員男性であり，女性や多様なセクシャリティの検討ができていない。一般的に友人関係の持ち方や友人観に性差があるとされてきたうえ，思春期を迎えると親密な関係性を意識するようになることから，仲間関係・友人関係がセクシャリティによって限定されやすくなる節がある。ASD の子ども自身が関わっていく集団の質が異なる可能性があり，それにより特有の葛藤も生じるだろう。またこれまでの研究から ASD のある女子の方が男子よりも社会的動機づけや友情の質といった点で定型群との差が少なく，さらに社会生活における葛藤を識別し，対処することに苦労していることもが示唆されており（Sedgewick et al.，2016），社会的動機づけの特徴を探るうえでも差異が生じるものと考えられる。したがって今後の研究においては男性以外のセクシャリティにも焦点を当て，検討することが必要だろう。

次に，ASD のある思春期の子どもたちの社会的動機づけの特徴に関する示唆は得られたが，これが ASD に特有のものであるのかどうかは検討はできていない。例えば，興味関心が合う，共通点があるという条件は特性の強さに関係なく他者との関わりを促す要素であると思われる。そのため，ASD のある子どもたち特有の社会的動機づけの特徴として同定するには，定型発達の子どもへの調査も必要となるだろう。

そして調査手法の限界点として，半構造化面接という形式をとる以上，ある程度の言語表現の力が必要になることから，コーディングされうる文字テキストデータが言語によるコミュニケーションをある程度可能とする子どもの語りに限られてしまうということが挙げられる。インタビュアーの質問の内容を理解できずちぐはぐな回答をしてしまったり，社会的事象や自身の行動や内面の振り返りという ASD には苦手なことに対して集中を保てなくなってしまったりするようなことも，インタビュー中にたびたび生じ，面接者の追加の質問や保護者の補足説明を要することも少なからずあった。ASD 傾向の強さや知的発達水準・言語発達水準によっても，SMI の適用範囲は限られてくることが示唆される。

また，文字テキストデータとして打ち出した際に，何を意味しているのか解釈しにくい語りもあり，一部これらは分析対象にできないこともあった。インタビューでの追加の質問や聞き取りの不十分さも否めず，方法論上の限界も否定できない。また，第一次コードについての評定者間信頼性についても，κ 係数が中程度で高いものとはいえず，

インタビュー結果の解釈についても今後検討が必要になるであろう。SMI 自体の心理測定特性の検証とともに，臨床適用する際には面接者・検査者の実施・スコアリング・解釈についてのトレーニング方法の整備についても今後課題となるであろう。

最後に，今回の結果は示唆に留まるものであり，他の ASD のある子どもが必ず今回示した結果と同じ認識を持っているものとは限らない。ASD のある思春期の子どもの社会的動機づけに対するアセスメントにおいては，今回取り上げたような子ども本人の認識を従来の行動評価と併せることで，包括的でかつ一人一人に目を向けた個別性を大事にした評価を心がける必要がある。

謝　辞

本研究を進めるにあたり，研究に快くご協力をいただいた６名のグループ活動の参加者ならびに保護者の皆様，グループ活動に参加したスタッフの皆様，そして翻訳作業や分析に際してご意見をくださった当所属ゼミの皆様へ，心より感謝申し上げます。

文　献

American Psychiatric Association (2023). *APA Dictionary of Psychology autism spectrum disorder (ASD)*. https://dictionary.apa.org/autism-spectrum-disorder?_gl=1*aau80a*_ga*MjUyOTI3NTczLjE2NTU3OTY5Mjc.*_ga_SZXLGDJGNB*MTcxMjMxMTAzNi4xNi4xLjE3MTIzMTE4OTMuMC4wLjA.〔accessed April 2024〕.

Bagg, E., Pickard, H., Tan, M., Smith, T. J., Simonoff, E., Pickles, A., Carter, L. V., Bedford, R. (2023). Testing the social motivation theory of autism: the role of co-occurring anxiety. *Journal Child Psychol and Psychiatry, 0*(0): 1-11. https://doi.org/10.1111/jcpp.13925

Bandura, A. (1985)「自己効力（セルフ・エフィカシー）の探求」祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊（編）『社会的学習理論の新展開』，103-141．文京区： 金子書房 .

Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. The MIT Press.

Capriola, N. N., Maddox, B. B., & White, S. W. (2016). No Offense Intended: Fear of Negative Evaluation in Adolescents and Adults with Autism Spectrum Disorder. *Journal of autism and developmental disorders, 47*(12): 3803-3813. https://doi.org/10.1007/s10803-016-2827-0

Chen, Y. W., Bundy, A., Cordier, R., Chien, Y. L., & Einfeld, S. (2015). Motivation for everyday social participation in cognitively able individuals with autism spectrum disorder. *Neuropsychiatric Disease and Treatment, 11*: 2699-2709. https://doi.org/10.2147/NDT.S87844.

Chevallier, C., Kohls, G., Troiani, V., Brodkin, E. S., Schultz, R. T. (2012) The Social Motivation Theory of Autism. *Trends in Cognitive Sciences. 16*(4): 231-239. https://doi.org/10.1016/j.tics.2012.02.007

Constantino, J. N. & Gruber, C. P. (2012). *Social Responsiveness Scale-Second Edition (SRS-2) Manual*. Western Psychological Services.

Dawson, G., Rogers, S., Munson, J., Smith, M., Winter, J., Greenson, J., Donaldson, A., & Varley, J. (2010). Randomized, controlled trial of an intervention for toddlers with autism: the Early Start Denver Model. *Pediatrics, 125*(1): e17-e23. https://doi.org/10.1542/peds.2009-0958

De Los Reyes, A., Thomas, S. A., Goodman, K. L., & Kundey, S. M.A. (2013). Principles underlying the use of multiple informants' reports. *Annual Review of Clinical Psychology, 9*(1): 123-149. https://doi.org/10.1146/annurev-clinpsy-050212-185617

Elias, R., & White, S. W. (2019). Measuring Social Motivation in Autism Spectrum Disorder: Development of the Social Motivation Interview. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 50*(3): 798-811. https://doi.org/10.1007/s10803-019-04311-7

Frith, U., & Happé, F. (1999). Theory of Mind and Self Consciousness: What Is It Like to Be Autistic? *Mind & Language, 14*(1): 1-22.

本田秀夫（2017）『自閉スペクトラム症の理解と支援 子どもから大人までの発達障害の臨床経験から』杉並区：星和書店 .

本田秀夫（2018）「第５章　選好性（preference）の観点からみた自閉スペクトラムの特性および生活の支障」鈴木

國文・内海健・清水光恵（編）（2018）『発達障害の精神病理Ⅰ』97-114．杉並区：星和書店 .

Howlin, P.（1997）*Autism: Preparing for adulthood*. London: Routledge.（久保紘章, 谷口政隆, 鈴木正子（監訳）（2000）『自閉症　成人期にむけての準備　―能力の高い自閉症の人を中心に―』千代田区：ぶどう社 .）

稲田尚子(2015)「尺度翻訳に関する基本指針」『行動療法研究』41(2)：117-125.

Jaswal, V. K., & Akhtar, N.（2018）. Being versus appearing socially uninterested: Challenging assumptions about social motivation in autism. *The Behavioral and Brain Sciences, 42*: e82. https://doi. org/10.1017/s0140525x18001826

神尾陽子（2017）『日本版 SRS-2 対人応答性尺度マニュアル』：日本文化科学社 .

古長治基（2022）「青年期自閉スペクトラム症者の社会的動機づけに着目した心理的支援の展開」『リハビリテイション心理学研究』48(1), 23-34.

Kasari, C., Gulsrud, A. C., Wong, C., Kwon, S., & Locke, J.（2010）. Randomized controlled caregiver mediated joint engagement intervention for toddlers with autism. *Journal of autism and developmental disorders, 40*(9): 1045-1056. https://doi.org/10.1007/s10803-010-0955-5

Lai, M. C., Hull, L., Mandy, W., Chakrabarti, B., Nordahl, C. W., Lombardo, M. V., Ameis, S. H., Szatmari, P., Baron-Cohen, S., Happé, F., Livingston, L. A.（2020）. Commentary: 'Camouflaging' in autistic people - reflection on Fombonne（2020）. *Journal of Child Psychology and psychiatry, and allied disciplines, 62*(8): 10.1111/jcpp.13344. https://doi.org/10.1111/jcpp.13344

Livingston, L. A., Shah, P., & Happé, F.（2019）. Compensatory strategies below the behavioural surface in autism: a qualitative study. *The lancet Psychiatry, 6*(9), 766-777. https://doi.org/10.1016/S2215-0366(19)30224-X

Livingston, L.A., Shah, P., Milner, V., Happé, F.（2020）. Quantifying compensatory strategies in adults with and without diagnosed autism. *Molecular Autism, 11*(1): 15. https://doi.org/10.1186/s13229-019-0308-y

Mitchell, P., Sheppard, E., & Cassidy, S.（2021）. Autism and the double empathy problem: Implications for development and mental health. *The British journal of developmental psychology, 39*(1), 1-18. https://doi.org/10.1111/bjdp.12350

Neuhaus, E., Bernier, R. A., & Webb, S. J.（2021）. Social Motivation Across Multiple Measures: Caregiver-Report of Children with Autism Spectrum Disorder. *Autism Research, 14*(2), 369-379. https://doi.org/10.1002/aur.2386

日戸由刈，藤野博（2017）「自閉症スペクトラム障害児者の仲間・友人関係に関する研究動向と課題」『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』68：283-296.

日戸由刈・本田秀夫・原郁子・藤野博（2017）「知的発達に遅れのない ASD 児者の友人関係にかんする追跡調査―地域療育センターを幼児期から成人前期まで利用した 12 事例の場―」『LD 研究』26(4)：464-473.

岡本百合・三宅典恵・永澤一恵（2017）「思春期青年期の自閉症スペクトラム」『心身医学』57(1)：44-50.

坂野雄二（2002）「1 章 人間行動とセルフ・エフィカシー」坂野雄二・前田基成（編）（2002）『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』京都：北大路書房 .

Sedgewick, F., Hill, V., Yates, R., Pickering, L., & Pellicano, E.（2016）. Gender Differences in the Social Motivation and Friendship Experiences of Autistic and Non-autistic Adolescents. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 46*(4): 1297-1306. https://doi.org/10.1007/s10803-015-2669-1

Swain, D., Scarpa, A., White, S., & Laugeson, E.（2015）. Emotion dysregulation and anxiety in adults with ASD: Does social motivation play a role?. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 45*(12): 3971-3977. https://doi.org/10.1007/s1080 3-015-2567-6.

土屋雅子（2016）『テーマティック・アナリシス法―インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎』京都府：ナカニシヤ出版 .

内山登紀夫・水野薫・吉田友子（編）（2002）『高機能自閉症アスペルガー症候群入門 正しい理解と対応のために』渋谷区：中央法規出版 .

吉川徹（2019）「大人の発達障害の就労支援」『心身医学』59(5)：429-435. https://doi.org/10.15064/jjpm.59.5_429

Abstract

The social interest of children with autism spectrum disorder (ASD) may emerge later than their typically developing peers, often resulting in gaps in social skills and motivation between them and their non-ASD children. Consequently, their caregivers and teachers tend to focus predominantly on the difficulties and behavioral aspects of children with ASD, overlooking the internally psychological aspects regarding interpersonal relationships. This study aims to investigate the features of social motivation in adolescents with ASD and methods for assessing it. Interviews were conducted with six children with ASD and their families using the Social Motivation Interview (SMI). Qualitative analysis was performed using thematic analysis, resulting in the generation of eighteen subcategories and six themes. These subcategories were broadly categorized into aspects arising from ASD characteristics and those that emerged secondarily from experiences. The study reflects on the characteristics of social motivation in children with ASD and their assessment perspectives.

Key Words：social motivation interview, Autism Spectrum Disorder, assessment, peer relationship, friendship